

修士論文（要旨）
2017年1月

中国人日本語学習者のモダリティ使用状況について
—「らしい，ようだ，みたいだ」を中心に—

指導 堀口 純子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
215J3008
馮 雯琪

Master's Thesis(Abstract)
January 2017

On the Use of Modality by Chinese Learners of Japanese:
Focusing on Rashii, Yō da, and Mitai Da

WenQi Feng
215J3008

Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor:Sumiko Horiguchi

目次

第1章	はじめに.....	1
1.1	研究背景.....	1
1.2	研究動機.....	1
1.3	研究の目的.....	2
第2章	先行研究.....	3
2.1	日本語のモダリティに関する研究.....	3
2.2	「らしい」「ようだ」「みたいだ」に関する研究.....	3
2.3	日本語教育場における「らしい、ようだ、みたいだ」に関する研究.....	4
2.4	本研究の位置付け.....	5
第3章	調査.....	6
3.1	調査概要.....	6
3.2	調査対象.....	6
3.3	調査内容.....	6
3.4	分析方法.....	10
第4章	調査結果及び分析・考察.....	11
4.1	選択問題の選択状況と分析.....	11
4.1.1	アンケート調査の設問 1.....	12
4.1.2	アンケート調査の設問 2.....	14
4.1.3	アンケート調査の設問 3.....	16
4.1.4	アンケート調査の設問 4.....	17
4.1.5	アンケート調査の設問 5.....	19
4.1.6	アンケート調査の設問 6.....	21
4.1.7	アンケート調査の設問 7.....	23
4.2	記述問題の回答状況と分析.....	26
第5章	協力者における選択基準の差異及び形成要因について.....	38
5.1	協力者による選択基準の差異.....	38
5.2	形成要因.....	39
5.2.1	母語の影響.....	39
5.2.2	教材における問題.....	40
5.2.3	接触場面.....	43
第6章	日本語教育への提案.....	45
第7章	本研究のまとめ及び今後の課題.....	47
7.1	本研究のまとめ.....	47
7.2	今後の課題.....	48
参考文献	i
参考ビデオ	ii
用例参考資料	ii
教科書参考資料	ii
資料1	(日本語母語話者用アンケート調査).....	I
資料2	(中国語母語話者用アンケート調査).....	IV

要 旨

物事の白黒をはっきりさせない、もしくは自己主張をあまりしないことが一般的な日本語の談話場面においては、和らげの機能を持つモダリティが頻繁に使われる。そのうち、「らしい」、「ようだ」、「みたいだ」は極めて類似しており、共通する用法も多く、定着しにくい文法項目であるとよく言われる。中国の日本語教育現場では、ネイティブ・スピーカーとの接触機会が少ないため、「らしい、ようだ、みたいだ」が実際に使われる場面に遭遇することが少ない。一方、中国人日本語学習者が日本に来て日本語の使用場面が増えるにつれ、モダリティを頻繁に使用する母語話者との接触を避けて通れないこととなってきた。こうした中で、モダリティは学習者にとって、直面しなければならない表現の一つなのだが、自然な接触の場面における「らしい、ようだ、みたいだ」の使用は学習者に、より適切なモダリティの使用を促しているのだろうか。その現状はまだ明確に把握できていない。

本研究では、モダリティとしての「らしい、ようだ、みたいだ」の三つの表現に関して、以下のことを明らかにすることを目的とした。

(1)日本語母語話者（JNS：Japanese Native Speaker、以下、JNSと略す）と、日本国内で学習した学習者（JSL：Japanese as a Second Language、以下、JSLと略す）、及び中国で学習した学習者（JFL：Japanese as a Foreign Language、以下、JFLと略す）の使用状況はそれぞれどのようなようであるか。

(2)JSLとJFLの使用状況に違いが見られるか。

(3)中国人日本語学習者の使用状況の形成要因は何か

以上のことを考察することにより、中国人日本語学習者が使用する「らしい、ようだ、みたいだ」についての理解が深まり、普段あまりうまく使えないモダリティに気づかせられれば、もっと適切に使えるようになるのではないかと考えた。そして、その知見を中国の大学及び日本語教育現場における「らしい、ようだ、みたいだ」に関する指導方法に活かせるのではないかと考えた。

第1、第2章では、研究の背景及び既存の研究による問題点について記述し、それらの内容を踏まえて本研究の目的を設定した。既存の研究による問題点としては、「らしい、ようだ、みたいだ」に関する研究では使用率を調査したものはあるが、主に在日留学生を対象とする研究であり、海外で日本語を学んでいる学習者に目を向けたものはほとんどない。そこで、本研究ではJNS、JSL、JFLを対象とし、それぞれの使用状況及びその形成要因について把握することを目的として研究を行った。

第3章では、本研究における調査対象を選定し、JNS、JSL、JFLの協力者に同じ内容のアンケートを用いてデータを収集し、そのアンケートの作成目的と分析方法について記述した。

第4章では、まず第3章で得られた選択問題におけるデータに基づき、JNSの選択の結果をSVMとして扱い、JSLとJFLがこの結果に近づくかどうかを見るために、全体及び設問別の分析を行った。そして記述問題において協力者が記述した内容からキーワードを抽出し、KW(キーワード)分類法を用いて分類し、代表性及び表現の分りやすさを重視した五つのキーワードで記述内容を帰納して整理を行った。

第5章で選択問題と記述問題の結果を比較したところ、どちらかだけを見る場合と異なった面が見られた。記述問題では語感で判断することや分らないと回答するJSLとJFLの人数はあまり変わらなかったが、選択問題ではJSLの方がJFLより「らしい」「ようだ」「みた

いた」の習得が進んでいることが確かに見られた。つまり、J S Lは使い分けに関する適切な回答が出せないとしても、語感などを判断の基準とする場合にはJ F LよりJ N Sに近づいていることが分かった。その状況の形成要因について、母語の影響、教科書における問題点、接触場面という三つの面から考察した。

第6章では、第5章で提出した形成要因に基づき、三点に分けて日本語教育への提案を考えた。

最後に第7章では、第1章から第6章までで得られたことをまとめて、本稿の総括とした。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2012) 「母語話者には意識できない日本語会話のコミュニケーション」『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 pp. 63-81.
- 大島弥生 (1993) 「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』 81 pp. 93-103.
- 柏岡珠子 (1980) 「ヨウだとラシイに関する一考察」『日本語教育』 41 pp. 169-178.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店.
- 北原保雄編 (2002) 『日本国語大辞典第二版 第十二・十三巻』小学館
- 菊地康人 (2000) 「「ようだ」と「らしい」—「そうだ」「だろう」との比較も含めて—」『国語学』 51-1 pp. 46-58.
- 金東郁 (1992) 「モダリティという観点から見た「ようだ」と「らしい」の違い」『日本語と日本文学』 17 pp. 21-31.
- 國澤里美 (2014) 「現代日本語における『認識のモダリティ』:世代差が生じる要因」名古屋大学学位論文 p. 56.
- 黄鈺涵 (2003) 「日本語初級・中級教材における推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」について — 台湾人日本語学習者のための提言 —」『早稲田日本語教育研究』 2 pp. 95-119.
- 谷莎 (2015) 『接触場面における上級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー』桜美林大学言語教育研究科提出修士論文.
- 今尚之 (1996) 「自由記述文の分析に対するキーワード分類法の適用」『小樽商科大学言語センター広報』 4 pp. 81-90.
- 坂本恵 (2002) 「日本語教育における待遇表現の扱い方」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 28 pp. 103-106.
- 佐々木泰子・川口良 (1994) 「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』 84 pp. 1-13.
- 柴田武 (1982) 「ヨウだ・ラシイ・ダロウ」『ことばの意味』 3 pp. 54-57 平凡社.
- 杉山ますよ (2014) 「演劇的手法を取り入れた活動の可能性」『日本語教育実践研究フォーラム報告』WEB版 pp. 1-9.
- 田野村忠温 (1991) 「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』 10 pp. 62-78.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 友松悦子・和栗雅子・宮本淳 (2010) 『どんなときどう使う日本語表現文型辞典』アルク.
- 中島孝幸 (1990) 「不確かな判断:ラシイとヨウダ」『三重大学日本語学文学』 1 pp. 25-33.
- 長友和彦 (1991) 「談話における「が」「は」とその習得について—Systematic Variation Model—」『日本語シンポジウム:言語理論と日本語教育の相互活性化』予稿集 pp. 10-24.
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 仁田義雄 (1992) 「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に—」『日本語教育』 77 pp. 1-13.
- 野林靖彦 (1999) 「類似のモダリティ形式「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」—三水準にわたる重層的考察—」『国語学』 197 pp. 89-76.
- 早津恵美子 (1988) 「『らしい』と『ようだ』」『日本語学』 7-4 pp. 46-61.

- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』 くろしお出版.
- 三宅知宏 (1995) 「『推量』について」『国語学』 186 pp. 76—86.
- 宮地幸一 (1968) 「<...みたようだ>から<...みたいだ>への漸移相」『学芸国語国文学』 3.
- 村野良子 (1984) 「ドラマ方式を用いた授業—日本語教育映画を使った場合—」日本語教育学会『日本語教育』 53 pp. 83—91.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』 角川書店.
- 山田陽子 (2011) 「中国の高等教育機関における日本語教育と学習者の一側面—遼寧省の大学を事例に—」『人間文化研究』 15 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 pp. 72—80.
- 余佳 (2012) 「中国人学習者におけるモダリティ習得遅れの原因について : 「ようだ、らしい、みたいだ、(し)そうだ」を中心に」『平安女学院大学研究年報』 12 pp. 50—57.
- Lado, R. (1957) *Linguistics across cultures: Applied linguistics for language teachers*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
- William Littlewood (2005). *Second Language Learning*. In Alan Davies and Catherine Elder (Eds.), *The Handbook of Applied Linguistics*, Blackwell Publishing